

「共生の平和社会のかたち」を

NCCが天皇の代替わりを考える集会

NCC（日本キリスト教協議会）靖国神社問題委員会は、違憲状態で天皇の代替わり儀式が行われる問題について考える集会を4月30日に東京・新宿区の日本基督教団信濃町教会で開き、113人が参加した。

新天皇即位（5月1日）前日の集会で、テーマは、「バベルの塔からの脱出―3・1独立運動100年が問いかける天皇制」。同テ

とです」と教皇は5月7日、北マケドニアからローマへ帰還する特別機に同乗していた記者団に語った。

教皇フランシスコは短いフライトの間、30分に満たない記者会見で、2016年8月に設置した女性助祭検討委員会についての質問にも答えた。

男女各6人の学者で構成された委員会は検討作業を終え、「幾つかの意見の一致」をみたが、当時の女性が叙階されていたのか、大修道院長のように荘厳に祝福されていたのかという重要な問題については意見がまとまらなかった、と教皇は明

合会との集いで女子修道会の総長らから次のような質問を受けていた。「どんな理由で教会は終身助祭に女性を加えようと思わないのでしょうか。原始教会ではその事例があったはずですが、この件について公式に検討する委員会を設置してはいかがでしょう」



記者会見で話すイエズス会の光延一郎神父、その左がキムさん

ームで講演を行ったNCC総幹事のキム・ソンジェ（金性濟）さんは、日本の近現代史を基に天皇制について改めて考える重要性を語った。

キムさんはまず、天皇制の是非を問う議論が起ころる心配もない日本の政治文化に言及。象徴天皇制の矛盾について、昭和天皇の戦争責任を問うことや、国民が果たすべき歴史に関する批判的議論に代えて天皇が慰問や慰霊

の旅を続け、戦争責任・侵略の加害責任を「隠蔽」してきた問題などを指摘した。かつて日本は、大日本帝国憲法で天皇を神格化し、領土拡張策を推進、植民地の朝鮮と在日朝鮮人に対する皇民化政策のために国家神道を強化・強要した。その中で起きたのが、在日朝鮮人留学生による「独立宣言」発表（1919年2月8日）と、翌月3月1日に韓国で起きた「3・1独立運動」だ。キムさんは、これら二つを、①天皇制国家神道体制に基づく大日本帝国の侵略と植民地支配への最初の抵抗②大日本帝国の武力による領土拡張策に対し、非暴力平和主義の共生世界を構築する構想を提示したものだ」と評価。

その上で、外国人労働者が搾取されている日本の現状にも触れ、今後は象徴天皇制による「国民統合」よりも、在日外国人と「共生の平和社会のかたち」を共に構想し、つくり上げていく、喜びと希望を広げる宣教の道を模索すべきではないかと語った。

集いでは、憲法に反する天皇代替わり儀式に反対してカトリックを含む24の教会・関連団体がそれぞれ発表した声明を紹介し、集会宣言も採択した。

記者会見では、教会側がマスコミに向け、天皇に対する過度な敬語表現は国民主権・平等の原則に反すると指摘、代替わりに際して公正な議論が担保されるために適切な報道を行うよう求めた。

日本カトリック司教

教皇は脱月した。